

INTERVIEW

隠岐島前病院 院長
白石吉彦先生



隠岐発、 何でもできる総合診療医になろう!

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

「私の専門はファミリーメディスンです」と言えるようになりたい

山田隆司(聞き手) 今日(きょう)は島根県隠岐島の西ノ島 隠岐島前病院に白石吉彦先生、裕子先生を訪ねました。

離島というのは現実的には医師があまり長くとどまらず短期間で交代してしまっていて、医師確保に困窮している例が多いと思いますが、先生方はこの島に赴任してもう19年ということではびっくりしました。また離島ならではの地域医療の情報発信をされていて、今や全国から注目の的にもなっていると思います。この場所で先生たちが元気にやっていて、そこへまた若い人たちが訪れて、医師、コメディカルだけでなく地域全体がこの離島を誇りに思っている雰囲気(きょうき)が島前地区にある気がします。そこへ至るため

に先生たちがやってきたことを教えてほしいと思います。

まずは、先生方が卒業してここに赴任した経緯からお話いただけますか？

白石吉彦 二人(ふたり)が知り合ったのは自治医大のソーシャルダンス同好会(どうこうかい)だったのですが……。

白石裕子 そこから話すの？(笑)

白石 それはともかくとして、私は5年生と6年生の間に1年間、中国医科大学に留学したのですね。そうしたら天安門事件(てんあんもんじけん)が起こるし、東欧革命(とうおうかくめい)ではチャウシェスク(チャウシェスク)が失脚(しつかく)したりなどがその年に起こって、どうなるかと思いました。でも面白かったのは30ヵ国60人の国費留学生と一緒(いっしょ)に留学生寮(りゅうがくせいりやう)に1年間(いちねん)住んだこと。半年間(はんとせき)はブル



西ノ島町国民健康保険
浦郷診療所 所長
白石裕子先生

ガリア人とルームメイトでした。冬休みはソフィアまでシベリア鉄道で行ったり、いろいろな経験をしました。

そういう体験をしたので、普通の卒業生が歩むような真っ当な医師の道を歩まなくても、世界中にはいろんな医者がいっているんじゃないかと思えるようになりました。

山田 あまりこだわらなくなった。

白石 そうそう。

それでソーシャルダンスに戻りますが、帰ってきたら、ソーシャルダンス同好会で学年的、身長的にパートナーになったのですね。競技会に出ようと思うと、週に2回のクラブの練習以外にも毎日練習をするのですね。そうしたらダンスはうまくならなかったけど愛が芽生えたという(笑)。

山田 (笑)卒業と同時に結婚したのですか?

裕子 本当は3学年違いなのですが、中国に留学したから1年縮まって、私の卒業直前に結納をして卒業と同時に結婚しました。

白石 彼女が島根県出身で私が徳島県出身ですが、最初から彼女は徳島県で初期研修を受けました。私が6年、彼女が4年、徳島での義務年限を終えた後、二人で島根に赴任したという形です。

山田 先生の診療科は内科ですか?

白石 徳島って県が小さいので、先輩をみると外科もいるし整形外科もいるし産婦人科もいるし、

何にでもなれたのですね。ところが5年生の3学期に、地域医療学教室にワシントン大学のファミリーメディスンのドクターが来て講義をしたのです。その話がとても面白かったので「先生のお話を聴いてファミリーメディスンにとっても興味を持った。科にとらわれずにcommon diseaseにきちんと対応するという概念はよく分かったが、生活ベースとか仕事ベースの姿、何時に起きて、どういうところに出勤して、どういう形態で働いているといったことが見えないので、春休みに訪ねたい」とその先生に話したのですね。そうしたらウェルカムだということで、当時の地域医療学教授の五十嵐正紘先生をお願いに行き、5年生のときに5週間シアトルへ行きました。

山田 すごい行動力ですね。

白石 ホームステイしたり寮に泊まったりして、市内で開業している人や大学で働いている人、山の上で一人でやっている人など、いろいろなファミリーフィジシャンのところで、1日から1週間くらいずつ見せてもらって、やっぱり自分のやりたいのはこれだなと思いました。

それまで感じていた一番大きな疑問は、へき地で働いている自治医大卒業生のところへ行って「先生の専門は何ですか?」と聞くと「外科だよ」とか「消化器内科だよ」という答えが返ってくるんですね。でもそれは大学にいた5年前にやっ